

第4報告（講演会報告／翻訳）

批判的実在論の応用研究のためのガイドライン

バース・ダナーマーク（Berth Danermark）ⁱ，佐藤 春吉ⁱⁱ 訳

本報告の目的は、批判的実在論の見方からする具体的な応用研究に寄与することである。社会研究には二つの大きな難題がある。第一のものは、社会的諸現象はオープンシステムにおいて生じるので、諸構造および諸メカニズムの複雑な組み合わせによって決定され、影響を受けることである。第二の難題は、個別的な観察からより一般的な知識に進まなければならないということ、またその逆の進行も同様である。そこには、推論についての二つの異なる意味がある。すなわち、それらは、形式論理学で扱われるし、思考操作としても扱われる。つまり、ある事柄から別の事柄に進むための二つの推論および思考法がある。批判的実在論には、複雑性と推論というこの二つの問題にかんして提供できる価値あるものがたくさんある。複雑性にたいしては、学際的な研究を導入して迫ることになる。推論 [の問題] は、推論の4つのモデル（演繹、帰納、アブダクション、リトロダクション）によって取り組まれる。ここでは、それらの推論の強みと弱みが論じられる。社会科学の研究は4つのすべてのアプローチを必要としている。ちなみに、演繹の弱点は、新しいことを何も語らないことである。帰納の弱点は、（単なる記述的経験的な一般化についてのみ語り）因果性については何も語ってくれないことである。アブダクションは、すでに知られた現象に新しい意味を与えるようなある種の再記述または再コンテキスト化のことである。リトロダクションは、「何がXを可能にしているのか？」と問う。本報告は、批判的実在論にもとづく方法論的ガイドラインを提供するものである。

序

批判的実在論は、具体的な応用的社会研究にたいして寄与することがあまりないと言われてきた（Wuisman, 2005）。これが公平な批判かどうかは主観的な判断の問題である。この数十年の間、具体的な社会研究において批判的実在論をどのように実践するかについて、多くの博士論文、科学論文 [が書かれ]、研究報告がなれてきた。しかしながら、内部、外部ともに、批判的実在論についての討議が、

多くの場合、哲学的およびメタ理論的なレベルの問題についてなされていることは確かである。そうした現状の一つの理由は、社会科学実践の分野における「分業」であると思われる。より哲学的な方向に関心を持つ科学者は、自ら具体的経験的研究に従事しないだろうし、その逆もそうである¹⁾。

[たしかに、] 批判的実在論が社会科学研究を行うためのガイドラインを提供しないというのは正しくない。とはいえ、それは包括的な方法論のハンドブックを提供するものではない。その主な理由は、批判的実在論に鼓舞された社会研究を遂行することが、狭い意味におけるある特定の方法を要請するわけではない、ということにある。批判的実在論は、現存の社会科学の方法論の長所と短所に対してどのように評価するのかについてのガイドラインを提供する

i スウェーデン オレブロ大学 スウェーデン障害研究所

ii 立命館大学産業社会学部特命教授

のである。現存の社会〔科学の〕方法論の「道具箱」のなかで提供される方法論は、批判的实在論に鼓舞された研究において使用されうるし、されなければならない。批判的实在論は、研究者を助けて、現存の方法の多くがもたらす還元主義、断片化、因果的な過度の単純化などの、落とし穴を回避させてくれるのである。

すでに述べたように、批判的实在論的研究をどのように実践するのかについては、継続的な論争と議論を行う差し迫った必要がある。この報告の全体的な目的は、批判的实在論にもとづく方法論についてのそのような議論に寄与することである。私は、ここでの議論を方法論の問題の二つの論点に絞ることにする。第一に、複雑性〔という問題〕をどのように扱うのか、第二に、社会研究における推論の相異なる様式についてである。

このようにすることで、多くの重要でかなり論争的な諸問題が、前面に持ち出される。しかし、この論文では、そこでなされる方法論的な記述と提案によって引き起こされる哲学的な諸問題のすべてを論じるような深入りはしない。

本論での議論を複雑性と推論の問題に制限することの合理性は二つある。

第一に、社会研究を遂行するうえでこの二つの観点〔を上げること〕は当を得たものであるということ。第二に、上記の二つの主題にたいして、〔特に〕批判的实在論からの寄与が重要だ、ということである。

複雑性は、社会レベルにおける多かれ少なかれすべての出来事や諸条件が非常に多くのメカニズムによって決定され影響を受けるということから、問題にされることになる。社会問題にある包括的な説明を与え、しかもその分析を還元主義的な記述と説明に縮減しないということを目的にして、その際、同時に多くのメカニズムの因果的な圧力が存在することを自覚して、どのメカニズムがより重要かについてなにも語ることをしないような場合、社会問題にアプローチするのは、難しい仕事である。複雑性

は、異なるレベルにおけるさまざまなメカニズムの相互作用の分析を呼び起こすのだから、私は、複雑性を学際性〔の必要〕ということから論じようと思う。

推論の問題を取り上げる主な理由は、それが科学の最も重要な側面、つまり、個性記述の科学と法則定立的科学との関係、に関連しているからである。最初のもは、ある現象の個別的で個人的な側面に関連している。これにたいして、後者は、社会現象の一般的でしばしば普遍的な側面に関連している。推論の重要性について議論することの合理性をさらに基礎づけるために、私は、研究を遂行する三つの側面について論及しようと思う²⁾。第一に、すべての社会科学的研究は、一般化的な主張をもたねばならない。第二に、一般化とならんで、それは、説明的な目的をもたねばならない。第三に、第一と第二の目的を満たすために、推論の多様な様式が不可欠である。

複雑性と学際的研究

ここでは、社会科学における複雑性という用語の使用法についてさらに詳しく述べる場所ではない。複雑性は、エミール・デュルケーム、マックス・ヴェーバー、ゲオルグ・ジンメルのような古典的社会学者たちにとっての関心事であった。後に、タルコット・パーソンズが彼の『社会システムの理論』に「システム論」を導入することで複雑性の問題に取り組んだ。複雑性は、ここでは、多くの部分からつくられ、したがって、それらの諸部分の間の多くの関係が存在しているようなある現象として取り上げられた。それは、たとえば、複雑性適応システム〔Complex Adaptive System〕のような、社会についてのなにか特殊な理論をさしてはいない。

社会にとって意義ある重要な諸現象、たとえば、福祉〔Well-being〕、貧困、健康およびジェンダー関係を分析するさいに、断片化や還元主義や過度の単純化を避けるなら、ある全体論的なアプローチ〔a

holistic approach] が要請される。そこで、社会学者として、私たちはしばしば、現象の複雑性のために他の諸科学から [利用可能な知や方法を] 取り込むという課題に直面する。このことが、学際研究 [Interdisciplinary research] (IDR) を要求する。これまで、IDR について多くの定義が提出されてきている。そのなかでも最も一般的なものは、単に認識論的で方法論的な諸要素を包含するだけのものがある。たとえば、アボレラ他 [Aboelela et al.] (2007) は、学際性を次のように定義している。

学際研究は、二つまたはそれ以上の異なる学科からなる学者たちによってなされたなんらかの研究または一連の諸研究のことである。その研究は、それらの諸学科の理論的な枠組みを結びつけ、統合するある概念モデルに基づいている。それはまた、その研究過程の複数の段階を通じて関係する諸学科の観点やスキルを使用することを要請する (p.341)。

IDR についての文献を見渡してみると、IDR についての議論のなかに、メタ理論的な [問題への] 自覚の欠落というやっかいな問題が存在していることが分かる (その問題にたいするいくつかの重要な貢献もあるにはあるのだが、たとえば、Finkenthal, 2001, Nicolescu 1996, Bel Habib 1990参照)。その欠落のなかには、存在論的な次元 [についての自覚の欠落] も含まれている。そのうえ、IDR の実践の歴史は、IDR の目指された統合的レベルに到達することに失敗しているような多くの研究があることを示している (つまり、単なる多くの学科の [寄せ集めの] 帰結、すなわち、全体的な知識への統合なしの研究過程、で終わっている) (Bhaskar & Danermark, 近日公刊予定 [Interdisplinality and Well-Being])。

批判的実在論は、どのようにして IDR をさらに発展させることに貢献できるのだろうか? 上で述べたように、批判的実在論は、IDR についての議論に存在論的な次元を導入することによって、IDR に対

して提供できる多くのものを持っている。つまり、「学際性を可能にするためには実在の性質はどのようなものであらねばならないか?」という存在論的な問いを提出することによって、存在論的次元が照らし出されるのである。

この文脈では、批判的実在論のいくつかのキー概念が他の概念よりも重要になる。レベル、構造、メカニズム、そしてその諸結果は、そうした重要な諸概念にあたる。諸レベル [が存在する] という存在論的な前提は、学際的な研究が、さまざまな方法を使うさまざまな構成レベルをとともなう複雑な諸現象を分析するためのものだという含意している。その際、研究者は、それぞれのレベルの現象の発現を説明し理解するために発展させられたさまざまな概念およびさまざまな理論を活用することになる。

アボレラ他 (2007) によって提示された定義の認識論的な部分で注意すべき重要な点は、その分析では、すべてのレベル、遺伝子から規範までを含めるのではなく、研究の目的にとって意義あるレベルだけを含めるという点である。つまり、時には、二つの近接した主題 (あるいは知識領域) を含むだけで十分かもしれない。時には、その分析に、心理学的、社会的、文化的レベルが含まれるかも知れないが、時にはもっと包括的なアプローチが必要となる。後者の例では、障害研究における IDR を論ずる時に、バスカーとダナーマーク Bhaskar & Danermark (2006) が、次の点を強調している。「メカニズム、文脈のタイプ、そして特徴的な諸結果において、(1) 物理的、(2) 生物学および特殊生理学的、医学的または治療的、(3) 心理学的、(4) 心理社会的、(5) 社会経済的、(6) 文化的、そして (7) 規範的なもの、これらすべてが、障害研究のような分野の諸現象の理解にとっては不可欠なものである」(p.288-289) と。

第一の方法論的ガイドラインは、ある複雑な現象の分析は多くの重要なレベルを含まねばならないことを認識することである。それらのどのレベ

ル [をとりあげる] かは、研究の目的との関係で決定される。

それぞれの重要なレベルにおいて、研究対象になっている諸現象を説明するにあたって重要な、構造、メカニズム、そして出来事が存在している。たとえば、もしその研究が、障害を持つ人々の労働可能性と労働生活のリハビリテーションという概念に焦点化しているならば、多くのレベルが現実化される [現実的効果を発揮する]。簡単に言えば、生物学的、心理学的、社会的レベルが現実化される。つまり、そこには、その現象の適切な分析にとって重要な、さまざまなレベルのメカニズムが存在しているのである。これらのメカニズムは、まさにそのレベルの構造のゆえに可能になっているのであり、それらのメカニズムが出来事を生み出すのである。このことは、アンドリュー・セイヤー [Andrew Sayer] によって次のように描かれている。

労働可能性の例を生物学的なレベルでみれば、人は、労働可能性にとって重要な身体構造やメカニズムを研究しなければならない。突然耳が聞こえなくなる状況におそわれた人のリハビリが問題になる時に重要になる身体構造の例は、内耳の構造と脳の構造ということになる。これらの構造 [のあり方] が、

雑音の多いところでの話を認知する能力を妨げるようなメカニズムに帰結しているのかも知れない。そのようなメカニズムによって生み出された出来事がコミュニケーションの困難の原因となっている。心理学的レベルでは、効果的な戦略行使を促進したり妨げたりするような構造が存在する。そのような構造、すなわちデレク・レイダー [Dereck Layder] (1993) が「個人の心理学」と呼んだものだが、それが、今度は自尊心 (メカニズム) の欠落と社会的な相互行為 (出来事) からの引きこもりを生み出すかもしれない。社会的レベルでは、たとえば、どのようにしてリハビリが組織されるのかについての包括的な分析にとって重要な数多くの構造が存在している。それは、早期の退職を強制するようなメカニズムを生じさせる。また、そのような出来事は、抑鬱や貧困な経済的状态を生み出すかも知れない。

重要なそれぞれのレベルに関する第二の方法論的ガイドラインは、最も重要な構造を、そして、それらが生み出すメカニズムを、それらのメカニズムによって生み出される出来事を、同定することである。

このことの意味するところは、研究者たちは、彼

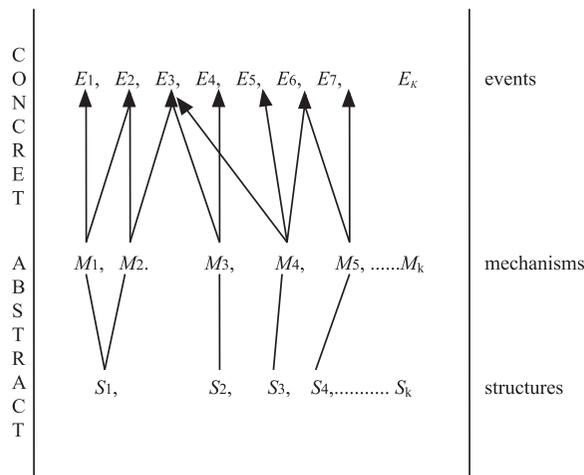


Figure 1. Structures, mechanisms and events. [図1 構造, メカニズム, および出来事]

らが研究しているそれぞれのレベルにおける現象の現出を説明し理解するために発展させられた、相異なる諸概念や諸理論を使用するということである。学際性を理解する仕方は、諸理論、諸概念および諸方法を単一化 [unify] することによる統合 [integration] を強調するような仕方とは異なる。そのような単一化が、批判的実在論のアプローチによって可能になるわけではないのである (Danermark, 2002ab)。このことは、上述の労働可能性と聴覚の損傷についての研究の例で明確に説明されている。現象の深部の分析 [in-depth analysis] を遂行するためには、たとえば身体構造についての理論、つまり内耳の聴覚機能についての生物学理論と諸資源の社会的な認識と分配についての理論に依拠しなければならない。

さらに、方法論についての [そのレベル特有の] 専門知識が必要となる。それぞれのレベルはそれに [特有の] 特殊な方法を要請する。全体的な理解の努力を实らせるため使用されなければならない多くの適切な科学的方法が存在すると述べることは、ある人々にはあたりまえのことだが、他の人々にとっては異論があるだろう。たとえば、カナダのある研究では、生命医学の研究者の多数がその研究において質的な研究の価値を非科学的なものだと判断していることを暴いている (Albert et al. 2008)。

第三の方法論的ガイドラインは、第一のガイドラインにそくして確定されるそれぞれのレベルにあわせて開発された理論や方法を用いるべきであるということになる。

複雑性の取り扱いにかんする以上の三つのガイドラインを与えたあとで、今度は、推論の問題に向かうことにしよう。第二の方法論的なガイドラインは、研究の対象となる現象の理解と説明に寄与できるような、最も重要なまたは基礎的な構造およびメカニズムを特定することだった。しかし、どのようにしてそのことが成し遂げられるのかについてはなに

も述べていなかった。この点が、次節で（部分的にだが）論じられるべき課題になる。

推論の多様な様式³⁾

推論 [inference] とはなんであろうか？一番多いのは、推論とは、真であると知られているかまたは想定されている諸前提から論理的な結論を導き出す過程を指す。以下では、この概念は、二つの意味で用いられる。一つは、上で示されたような論理的意味において、他のもう一つはより広いそしてより形式的でない仕方でも用いられる。ユルゲン・ハーバーマス [Jurgen Habermas] (1972) が、ある物事から他のある物事へ移行するための論証と思考のさまざまな仕方として描いた過程がそれである (p.113)。しかしながら、上の後の部分（ある物事から他のある物事への移行）は、あらゆる推論の形式に共通するものだと言える。[二つの用法の] 違いの意味は、推論遂行の仕方には、明確で論理的な移行の仕方があるが、他方では、もっと創造的で革新的な仕方もある、ということである。

推論は、なぜ重要なのであろうか？これまでのところでは、科学したがって研究は、一般化の努力を有していなければならないと主張された。一般化を解釈する際に慣習となっているやり方は、ある観察からより大きな文脈へと外挿することである。あるサンプルにおける振る舞いからある全体集合における振る舞いへと外挿するような場合もあろう（例えば、もし今選挙があれば、人はどのような投票をすることになるかについての世論調査）。また、ある薬品がどのように働くかについてのある小さなサンプルにおける観察から、人々のより大きな集団へと外挿するような場合もありうるだろう（例えば、薬学者による薬剤試験）。多くの場合、そのような過程には準拠集団も含まれている。推論のこのようなタイプのためには、次のような特殊な規則が存在している。

このタイプの推論は、*帰納*と名づけられている。

- サンプルング（代表）— 全体集団の小宇宙
- エラーのさまざまなタイプを考慮に入れる（例えば、見落とし）
- 意義のある検証

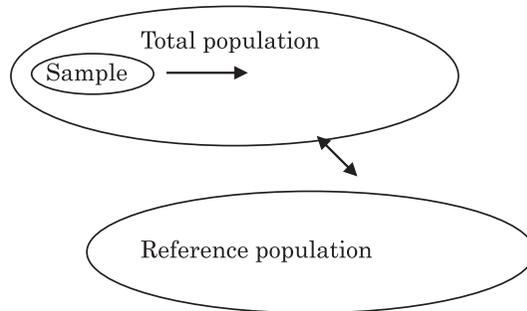


Figure 2. Example of inductive inference and generalisation in social research
 (図2 社会研究における帰納的推論と一般化の例)

それは、一般化および経験的および統計的な外挿法を理解するための主流となっているやり方に密接に関連している。

批判的実在論では、一般化を理解するための追加的な方法がある。それは、[たしかに] 追加的なものである。というのも、批判的実在論は経験的ならびに統計的な外挿法を排除しないからである。それは、外挿のこのような方法が重要なものであり、かつ研究において必要なものと認めている。しかし、それはこのタイプの外挿法の重要な限界、欠陥についても、明らかにする一まもなくこの点に戻るつもりだが—。批判的実在論は、推論の過程にアプローチするより基本的な方法をもっている。それは、帰納とは反対に、経験的なレベルから構造とメカニズムのレベルに移動する方法として基本的なものである。この方法が、批判的実在論者をして、表面的なものにとどまっている人々と比して、別のタイプの結論を導くことを可能にする。ここで採用すべき二つの様式があり、それらは、*アブダクション* [*abduction*] と *リトロダクション* [*retroduction*] である。

[この他に] 第三の推論のタイプ、つまり演繹がある。それは、ある意味では、すべての科学的実践に共通のものである。推論のこのやり方は、純粋に

論理的である。それは、ある科学的な論証が論理的な意味で妥当であるか否かを確かめるために使用される。

私は推論の様式の三つのタイプつまり、演繹、帰納、そしてアブダクション/リトロダクションについて簡単に指摘した。ダナーマークラ (2002) は、アブダクションとリトロダクションを区別しているが、これにたして、他の人々はそれらを区別せずに同義的に使用している (Wuisman 2005を参照)。私は、推論のより広い記述を使用してこれら二つの過程を区別しているが、その理由については、あとで立ち戻ろうと思う。次のいくつかの段落では、それらの [推論の] 諸過程の相違、長所と短所について、簡単にその概略を述べようと思う。

帰納

それが科学で広く用いられているので、まず帰納から始めよう。以下では、私はこの帰納という概念を一般的な意味で用いることにする。哲学では、帰納は、ここで使用されるものよりも、もっとニュアンスに富み洗練されている。過度に単純化されたここでの意味は、個別的な観察から一般化に進む過程を指示するだけである。注意すべき重要な点は、こ

のタイプの推論から引き出されるすべての結論は、ある程度不確かなものだというのである。このことは、これらのすべての結論は既知のものを超えているということを意味する。しかし、帰納の帰結の不確かさを減少させるために、多くの統計学的な手法ならびに特殊な論理的な論証、例えばベイズ主義的な論理、が発展させられている。

帰納には、統計学的ならびに論理的な方法によっては語られないようないくつかの弱点が存在する。社会科学に帰納を適用するときには、それが、開放された常に変化する現実に適応されているという事実を、帰納における深刻な限界として、時間の次元を導入した場合は〔特に〕、自覚しておかなければならない。この問題は、水は、明日も明後日もある一定の温度で沸騰するだろうという結論を導き出す場合に明らかになる。結論が基礎を置いている前提が何一つ変化しないと仮定するとき、それは確かなことである。しかし、選挙で誰が勝つかを一ヶ月前のまたは一週間前の世論調査にもとづいて予測するような状況では、不確実性の度合いは、重大なものになる。

帰納の他の限界は、そしてこれは根本的な限界なのだが、この推論のしかたは現実の表面から離れることがないということである。すなわち、それは、どのようにして、研究対象の出来事を生み出している諸構造とメカニズムについての知識に到達するかについてのガイドラインをなんら与えない。要約すれば、それはなぜ？という疑問〔why question〕に答えないのである。例えば、それは、なぜ人々はそのように投票するのか？という問いには答えない。時には、そのようなことは研究の目的ではないのである。研究は、社会生活のある側面、たとえば中東からの移民たちの社会的な表現の記述に限定されているかもしれない。しかし、もし、そのような研究の結果の背後にあるメカニズムを理解しようと望むならば、帰納は役に立たない。上で、私は、科学は説明的な目的を持っており、帰納はその方向のなかの一つのステップでしかない、と述べた〔とおりで

ある〕。

演繹と比較した場合の帰納の重要な強みは、それが既知の知識から何か新しい知識に進むという点である。すなわち、それは、それらがある程度の不確かさ（帰納的確率性）と結びついているとしても、法則の用語によって新しい知識を生み出すのである。

第四の方法論的ガイドラインは、帰納は注意深く遂行されなければならないということであり、帰納の限界を超えているような結論を引き出してはならないということである。

演繹

帰納の帰結は、しばしば法則、あるいは一般的言明と呼ばれるいくつかの一般的な諸原理を含んでいる。〔これにたいして〕演繹を適用する通常の仕方は、ある一般的言明を前提（A）とし、個別的な観察（B）を第二前提として、AとBに基づいてある結論を引き出すものである。結論を妥当なものにするために、結論は前提から導き出されなければならない。以下の例は、演繹過程を定式化する多くのものの一つにすぎない。しかし、単純化のために、この例を持ち続けることにする。というのも、それは、演繹の原理を、その短所と長所ともに、よくとらえているからである。

演繹の一般的な例は、次のようなものである。

前提 A（一般的言明）	すべての人間は死すべきものである。
前提 B（個別的言明）	アリストテレスは人間である。
結論（論理必然的結論）	アリストテレスは死すべきものである。

この他のどのような結論を導くことも論理的な矛盾をもたらす。

前提が真であれば、結論も真でなければならない。

したがって、前提が真でなくても、結論は論理的に妥当であることになる。もし、前提Aの「死すべきもの」を「不死なるもの」に置き換えたら、「アリストテレスは不死なるものである」という結論をうる。これは、[論理的には] 妥当な結論であるが、明らかに誤った結論である。演繹的な結論は分析的な結論であるということを中心としておくことが重要である。それは、前提の中に含まれていないものについては何事も語ってはくれない。

第五の方法論的ガイドラインは、演繹は、妥当な結論に到達するためには、すべての研究で遂行されねばならない、妥当な結論が真であるかどうかは前提に依存している、となる。

思考過程におけるその他の二つの方法

ここで、ある事柄から他の事柄に進む、あまり議論されることのない、アブダクションとリトロダクションという二つのやり方に戻ることにする。これから示すとおり、それらは、社会科学の研究ではとてもなじみのあるものである。多くのよく知られた社会学研究者たちが、ある事柄から他の事柄に進む際に、その理由づけ [reasoning] のより包括的なやり方を適用しているにもかかわらず、それらの過程は、社会学方法論の文献では、たまにしか表現されないし、議論されることもほとんどないものである。例えば、階級構造、ジェンダー構造、規範や規則、イデオロギー、権力構造および儀礼について語る場合、私たちは、暗に、一般的で基底的なメカニズムについて論じている。しかし、私たちは、どのようにしてそのような構造が存在しているという結論にいたるのであろうか？これが、続く諸節で論じられる問いの一つである。

アブダクション

私は、アブダクションから始めよう。というのも、それが、後に提示されるリトロダクションという他の推論様式よりも、もっとよく知られているものだからである。文献で、これまでに提示され論じられてきたものは、主にアブダクションの論理的な形式である。アブダクションはアメリカの哲学者、チャールズ・S. パースに結びつけられている。彼は、語用論と記号論の分野で仕事をしてきた。彼のアブダクションの提示の仕方は二重になっている。一方では、パースはそれを、帰納と演繹に比較可能な推論の論理的な形式として記述している。他方で、彼は、それを現象の再記述の創造的な一過程を含むものとしても記述している。(彼がアブダクションを論じる第三の道では、アブダクションは知覚一般に関係させられてもいるが、その点についてはここでは議論しない)。ここでは、私は推論のより広い理解である再記述に焦点を当てる。それは、再文脈化とも名づけられるだろう。その主な理由は、それが、社会諸科学で最も頻繁に実践される推論のやり方だからである。まず最初に、アブダクションに基づいて引き出される結論が説得力ある解釈だということを述べておくことが重要である。人は、それを十分に情報を与えられた [well-informed] 仮説と呼ぶかも知れない。ランダール・コリンズ (1985) は、アブダクションについて「広い意味での論理学の推論の様式であり、それによって、ある一連の観念から他の一連の観念の結論へと移行する」ものとして記述している (p.188)。それを、「アブダクション的な移行」として正当化するためには、いくつかの基準を満たしていなければならない。その移行は、より展開された記述に帰結しなければならない。その帰結は、現象のより深い概念を含んでおり、諸連関や諸関係を明らかにするものでなければならない。また、それは、その移行のまえに理解されていた仕方よりも異なって解釈されていなければならない。

要するに、それはすでに知られている（諸）現象に新しい意味を与えるものでなければならないのである。

この移行をどのようにして行うのかについて、また新しい意味に成功裏に到達するために、どのように以上の基準を満たすのか、については、なんらの指示も存在しない。しかしながら、文献のなかで見いだされる成功裏になされた再記述のある一貫した特徴は、研究者がその主題について熟知しているということである。もう一つは、研究者が創造的であり、想像力を駆使しているということである。第三の特徴は、アブダクションの過程では理論がある重要な役割を演じているということである。しばしば、そこには、ある現象がそのなかに位置づけられるような、一連の諸観念、または諸理論、が存在している。たとえば、宗教的な儀式のために集まっている人々については、神を崇拝しているとも解釈できるし、あるいは、デュルケームが行ったように、その儀礼を社会的凝集力をうみだすためのものと解釈することもできる。このことは、ある現象は研究者が使用する理論がどんなものかによって、多くの全く異なる仕方でも記述され、解釈されうるということを意味している。最も多くの場合、これらの新しい解釈が構造とメカニズムへの参照を含んでいるということである。

すでに述べたように、これらの新しい記述は討論に開かれている。それらは新しい仮説として記述されうるので、それが以前のものよりもよりよい記述であるかどうか、オルタナティブな記述としてよりよいものであるかどうかは、アプリアリに決めることはできない。パースは、アブダクションによって得られた新しい記述は、例えば実験を用いてテストされねばならないと論じている（Pierce 1905/1990: 244）。批判的実在論の文脈では、それらのテストは経験的になされうるだけでなく、思考実験でもありうる。

第六の方法論的ガイドラインは、現象の深さをさぐる理論的 [in depth theoretical] および経験的な知識をうることである。これに基づいて、現象の再記述のために、創造性と想像力を使用する。

リトロダクション

ダナーマーク他（2002）で、私たちは、リトロダクションは推論の分離された様式とみなされるべきであると論じた。しかし、リトロダクションをアブダクションの一部であると論じることもできるだろう。それは、基礎にある構造とメカニズムを見いだそうと努力する過程の一要素である。私たちは、リトロダクションがアブダクションの一部であると特徴づけられうることに、もちろん、同意する。基礎にある構造とメカニズムに明示的に関連していないたくさんの再記述が存在する。ウンベルト・エーコ（1984）が「過剰にコード化されたアブダクション」と呼んだ多くのものは、このタイプのものである⁴⁾。そのようなアブダクションは、しばしば予断に基づいている自然にわき出る解釈という一種の「自然さ naturalness」によって特徴づけられる。

私たちは、リトロダクションを、基礎にある構造とメカニズムを明らかにすることを目指す特殊な方法と過程として解釈している。これは、アブダクションについての主流の前提にはない超越論的な論証のタイプである。もし成功したアブダクションが、基礎的な構造とメカニズムに帰結するとすれば、リトロダクションは「構造にとって特徴的で構造的なもの」を明らかにする方法だと言ってもよいだろう（Danermark et. Al. 2002: 96）。リトロダクションにおいて取り上げられる基本的な問いは、「なにがXを可能にしているのか？」というものである。本報告の第一部で、IDRについて論じた時に述べたように、構造についての問いが前面に持ち出された。要するに、Xを可能にするものは構造であると論じることができる。では、この文脈で、構造とはなんである

うか? 私たちは、社会学者として、社会構造を取り扱っている。社会構造とは、社会諸関係の相異なる諸類型によって構成されている。この点で本質的なことは、Xを可能にしている諸関係を同定することである。このことは、実質的で内的な諸関係を同定することでなされる。バスカー (Bhaskar 1989) は、このような関係について、次のような定義を与えている。「ある関係 RAB は、BがAに対して、そのように関係していなければ、Aが本質的にAでなくなるとき、またそのときのみ、内的 [関係] と定義されてよい」。RAB は、もし同じことがBについても当てはまる場合、対称的で内的 [symmetrically internal な関係] である (p.42) (セイヤーも参照。Sayer 1992: 88f.)。別言すれば、この過程の核心は、研究対象そのものを解消することなしには排除できないような社会的な諸関係を見いだすことである。ダナーマーク他 (2002) のなかで、私たちは、社会学者たちが「何がXを可能にしているのか」という問いについて、このような取り扱い方を用いている多くの例をあげている。ユルゲン・ハーバーマス⁵⁾ (1984) の普遍的語用論の理論は、コミュニケーションの普遍的な諸条件を記述している。彼の理論で提示された諸特徴なしでは、コミュニケーションは不可能となるだろう。他の例は、ランダール・コリンズ (1990) の社会的連帯の理論である。彼はそこで、「何が儀礼を儀礼たらしめているのか?」(つまり、何がXを可能にしているのか?) という問いを提出している。これらの例は、社会学者たちは、明示的にこのような問い、つまり、「何がXを可能にしているのか?」への答えを探し求めていることを示している。構造やメカニズムを同定しようとする社会学者はこの他にも多くいる。しかし、明示的にこのような問いに基づかずそうしている。アーヴィング・ゴフマン (1963) のスティグマの理論は、その一例である。スティグマ化について彼の書いたものから、スティグマ化の前提条件を引き出すことが可能である。例えば、そこには、特定の特徴 (例えば、行動、集団帰属、属性) にたいして否

定的価値を帰するような規範の位階性を含んだ、社会的に共有された規範構造が存在しなければならない。他の例は、アクセル・ホネット (1995) の社会的承認の理論である。「何が社会的承認を可能にしているのか?」という問いをたてながら、ホネットのそれへの答えは、「相互承認」(ヘーゲルを参照した) と「独立と統制可能性を得ようとする基礎的な欲求」(フロイトを参照した) である。

これらの再記述はすべて意存的次元の一部であり、それらはすべて誤りうるものである。それらの諸言明のなかでさまざまな真理の程度を判断する形式的な方法は存在しない (真理論的な真理 alethic truth にかんする議論については、Groff, 2004: 71-98参照)。というわけで、オルタナティブな記述の篩い分けは超事実的な論証に基づいて可能になる。ときには、それらすべてがXを生み出し、それなくしてはXが存在しえない構造とメカニズムを表示しているような多くの競合する理論が存在する。ジグムント・バウマン (1989) は、その書『近代とホロコースト』で、「何がホロコーストを可能にしたのか?」という問いを出している。彼の答えは、手短かに言えば、条件1:「ガーデニング文化」(それにそぐわないものを剪定し、排除する社会的な統制)、ならびに、条件2:近代社会の官僚制的位階性というものである。彼の書『自由からの逃走』(1941)で、エーリッヒ・フロムは、「ファシズムとナチズムはなぜ魅力をもっているのか?」という関連した問いを出している。しかし、彼の答えは、バウマンの答えとは異なっている。フロムは、以下の二つの条件が一緒になったからだと主張した。条件1:新たなパーソナリティのタイプの発展、および、条件2:第一次世界大戦以後の時代のドイツにおける特定の社会経済的な諸条件、であると。ダナーマーク他 (2002) で、私たちは、同一の現象について異なる理論が存在しているような状況に対処するある方法について提案している。

私たちは、次のように書いている。

この段階では、アブダクションとリトロダクションによって記述されているメカニズムと構造の相対的な説明力を練り上げかつ評価する。……いくつかの場合には、ある一つの理論が、競合する理論とは異なって、説明されるべきものの必要な諸条件を記述しており、したがって、より大きな説明力をもっていると結論することがある。他の場合には、それらが部分的に異なるしかし必要な諸条件に焦点を当てていることによって、諸理論がむしろ補い合うこともある（p.110）。

リトロダクションは社会研究にとって不可欠な部分であると述べた。また、「これこれのメカニズムがXを生じさせているという結論に、いかにして到達するのか？」という問いに答えられないような事例を、文献からいくつかあげておいた。[そこに到達するための] 普遍的な方法はないが、しかし、社会科学研究では、たくさんのアプローチが用いられている。その一つの例は、エスノメソドロジー（ガーフィンケル Garfinkel 1967）である。この方法の目的の一つは、社会的構造のさまざまなタイプの基礎的な諸条件を暴くことである。その方法は、「やあ、元気かい？ How are you doing?」と問いかける友人のあいさつのような日常的な行為に、「私が何を気にしているかって？ 私の健康、懐具合、学校の仕事、心の平静、私の……？」と [答えて] 抗議するような要素を含んでいる（Garfinkel, 1967: 44）。そのような社会実験をおこなうとき、私たちが日常的な行為を当たり前だとみなしている社会構造とメカニズムを明るみに出すことができる。他の方法は、極端な事例や、病理的事例や、通常的事例の深さを探る研究 in depth study（つまり、戦略的に選択された事例研究）を行うことである。一つの戦略は、例えば、アフガニスタンのタリバーンのなかのジェンダー関係の研究のような、あるメカニズムがより「純粋」な形態において現れると期待できるような事例を探ることである。そのような方法が比較を用いる事例研究の方法と結びつけられるなら、例えば、

アフガニスタンのタリバーンのなかのジェンダー関係をカフカス人におけるジェンダー関係や中間階層のスカンジナビア人のジェンダー関係と比較してみたら、社会関係の異なる形態を確定するための、つまり、偶然的な諸関係を取り除いて、ジェンダー関係における男性支配を構成している内的関係を同定するための基礎を提供できるだろう。

リトロダクションの記述から多くの方法論的ガイドラインを引き出すことができる。以下では、最も重要ないくつかのものが示されている。

第七の方法論的ガイドラインは、次の質問から始めることである。何がXを可能にしているのか？

第八の方法論的ガイドラインは、形式的な関係と実質的な関係を区別することであり、実質的な関係のなかで、外的（偶然的）関係と内的（必然的）関係を区別することである。

第九の方法論的ガイドラインは、「再記述」の説明力を精査することである。

第十の方法論的ガイドラインは、伝統的な実験にたいするオルタナティブとして有意義で実践的な方法を選ぶことである。

以下の表1では、推論の異なる様式が比較され、多くの諸特徴と関係させられている。

結論：複雑性と推論

結論として、本報告で提案した方法論的ガイドラインを要約する。第一の強調点は、複雑な現象の分析は、多くの重要なレベルを含んでいなければならないということである。どのレベルを含むべきかは、研究の目的との関係で決められるべきである。第二は、それぞれのレベルで、最も重要な構造、構造がつくるメカニズム、メカニズムによって生産される出来事を同定することである。第三は、第一のガ

表1 推論の4つの様式

	演繹	帰納	アブダクション	リトロダクション
根本的構造／思考操作	所与の前提から論理的に妥当な結論を導く。普遍的法則から個別現象の知識を引き出す。	一定数の観察から全体に関する普遍的に妥当する結論を導く。一定数の観察における類似性を発見し、これらの類似性がまだ研究されていない事例にも当てはまることを主張する。観察された共変関係から法則類似の関係性に関する結論を導く。	概念的な分析枠組もしくは一連の観念の内部で、個別現象を解釈し再文脈化する。何かを、新しい分析枠組において観察し解釈することによって、それを新たな仕方理解することができる。	具体的な現象を記述・分析することから、ある現象をそのようにさせている基本条件を再構成する。思考操作と反事実的思考によって、超事実的な諸条件へと論及する。
形式論理	Yes	Yes	Yes and No	No
厳密な論理的推論	Yes	No	No	No
中心的論点	諸前提の論理的結論は何か？	一定数の観察されたものごとに通ずる要素は何か？そして、それはより大きな母集団についても真であるか？	特定概念枠組のなかで解釈されているものごとに、どのような意味が与えられるか？	何ものが可能であるためには、どのような特性が存在しなければならないか？
強み	すべての論証における論理的妥当性の導出と検査のための規則とガイダンスを提供する。	経験的一般化にかかわるガイダンスを提供する、また、その一般化の適切性を計算する可能性を部分的に提供する。	より広い文脈との関係において出来事に意味を与える解釈的なプロセスのためのガイダンスを提供する。	経験的ドメインにおいて直接的に観察できない、超事実的条件、構造、メカニズムに関する知識を提供する。
限界	演繹は、前提においてすでに明らかにされていることを越えて、実在に関して新しい何かについて語らない。それは厳密に分析的である。	帰納的推論は分析的にも経験的にも確かとは決していえない＝帰納の内的限界。帰納は経験的レベルの結論に限定される＝帰納の外的限界。	アブダクション的な結論の妥当性を、確実な方法で評価することのできる固定的な基準が存在しない。	リトロダクション的な結論の妥当性を、確実な方法で評価することのできる固定的な基準が存在しない。
調査者の側に求められる重要な資質	論理的な論証の能力	統計分析を駆使する能力	創造性と想像力	抽象化の能力
例	もしAならばB、AしたがってB。	スウェーデン人の代表的なサンプルにおける態度についての調査から、30%のスウェーデン人がEUに賛成しているという結論を導く。	カール・マルクス。史的唯物論の観点から人類の歴史を再解釈／再記述する。	儀式がまさに儀式であるためには、感情的に負荷された象徴と、侵すことのできない／神聖な価値についての共通の概念が存在しなければならない。

注：帰納の概念は、異なる哲学者／理論家によって、また異なるディシプリン内で、部分的に異なる方法で用いられる。ここでは、帰納的論理という意味で、帰納について語っている。社会科学において、帰納の概念は研究手続の特定の形態を記述するためにも用いられる。帰納的論理と帰納的研究を混同しないことが重要である。というも、これらの概念は部分的に全く異なることを含意するからである。

出典 Danermark et al. (2002: 80-81)

イドラインにしたがって同定された、それぞれのレベルのために開発された理論と方法を用いることである。第四は、帰納は、注意深く行われなければならないのであり、帰納の限界を超えるような結論を引き出してはならないということである。第五は、演繹は、妥当な結論に到達するためにすべての研究で実践されなければならない。第六は、深さの理論と現象の経験的な知識を獲得し、現象を再定義するために創造性と想像力とを使用するということである。第七の方法論的ガイドラインは、「何がXを可能にしているのか？」という問いから始めることである。第八は、形式的関係と実質的關係、後者では、外的(偶然的)関係と内的(必然的)関係を区別することである。第九は、「リトロダクション」の説明力を精査すること、そして最終的に、伝統的な実験のオルタナティブとして、有意義な実践的な方法を選択することである。これらのガイドラインを適用することは、一方では、伝統的な、社会学的および方法論的な手法を使用することであるが、他方では、そのことを社会学的な研究において当たり前になっている多くの手続きに挑戦するような仕方で行うことである。それは、革新的で、思考を喚起する洞察力のある知識を誘い出すことになるだろう。

注

- 1) 深さの哲学の議論を具体的な経験的社会研究に結びつけている一連の批判的実在論的研究がある。例えば、M. Archer (2012), Andrew Sayer (1992).
- 2) これらの三つの観点は、ダナーマーク他 (2002) で詳しく論じられ検討されている。
- 3) この節の一部は、ダナーマーク他 (2002) に基づいている。第4章「一般化、科学的推論、および説明科学の諸モデル」。
- 4) エーコもまた、アブダクションの二つの他のタイプ、過小コード化と創造的アブダクションに言及している。
- 5) ハーバーマスは、彼の方法論をリトロダクションではなく再構成的と名づけている。実際には、それはリトロダクションと多かれ少なかれ同じも

のである。

参考文献

- Aboelela, S. W., Larson, E. Bakken, S., Olveen, C., Formicola, A., Glied, S. A., Haas, J., & Gebbie, K. M. (2007). Defining interdisciplinary research: Conclusions from a critical review of the literature. *Health Research and Educational Trust*. 42(1), Part I: 329-346.
- Albert, M., Laberge, S., Hodges, B. D., Regehr, G., & Lingard, L. (2008). Biomedical scientists' perception of the social sciences in health research. *Social Science & Medicine* 66(12), 2520-2531.
- Archer, M. (2012) *The Reflexive Imperative in Late Modernity*. Cambridge University Press.
- Bauman, Z. (1989) *Modernity and the Holocaust*. Cambridge: Polity Press.
- Bel Habib, H. (1990) *Towards a Paradigmatic Approach to Interdisciplinarity in the Behavioural and Medical Sciences*. Research Report 90: 10, University of Karlstad, Sweden.
- Bhaskar, R. (1989) *The Possibility of Naturalism. A Philosophical Critique of the Contemporary Human Sciences*. Hassocks: Harvester Press.
- Bhaskar, R. & Danermark, B. (2006) Metatheory, Interdisciplinarity and Disability Research — A Critical Realist Perspective. *Scandinavian Journal of Disability Research*, 4: 278-297.
- Bhaskar, R. & Danermark, B. (forthcoming) *Interdisciplinarity and Well-being*. London: Routledge.
- Collins, R. (1985) *Three Sociological Traditions*. New York: Oxford University Press.
- (1990) Stratifications, Emotional Energy, and the Transient Emotions, in Kemper, Theodore (ed.) *Research Agendas in the Sociology of Emotions*. New York: State University of New York Press.
- Danermark, B. (2002a) Interdisciplinary Research and Critical Realism: the Example of Disability Research. *International Journal of Critical*

- Realism*. No.1: 56-64.
- (2002b) Different approaches in assessment. A meta theoretical perspective. *International Journal of Audiology*, Vol-42, Suppl. 1: 112-117.
- Danermark, B., Ekström, M., Karlsson, J. & Jakobsen, L. (2002) *Explaining Society. Critical Realism in Social Sciences*. London: Routledge.
- Eco, U. (1984) *Semiotics and the Philosophy of Language*. London: Macmillan.
- Finkenthal, M. (2001) *Interdisciplinarity: Toward the Definition of a Metadiscipline?* American University Studies, Series V, Philosophy. Vol. 187. New York: Peter Lang.
- Fromm, E. (1941/2011). *Escape from Freedom*. Ishi Press, New York.
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in Ethnomethodology*. New Jersey: Prentice-Hall.
- Goffman, E. *Stigma and Social Identity. Notes on the Management of Spoiled Identity*. Prentice-Hall, 1963.
- Groff, R. (2004) *Critical Realism, Post-positivism and the Possibility of Knowledge*. London: Routledge.
- Habermas, J. (1972) *Knowledge and Human Interests*. Boston: Beacon Press.
- (1984) *The Theory of Communicative Action. Volume one*. Cambridge: Polity Press.
- Honneth, A. (1995) *The Struggle for Recognition: The Moral Grammar of Social Conflicts*. Polity Press.
- Layder, D. (1993) *New Strategies in Social Research. An Introduction and Guide*. Cambridge: Polity Press.
- Nicolescu, B. (1996) LA TRANSDISCIPLINARITÉ-Manifeste, Éditions du Rocher, Monaco.
- Sayer, A. (1992) *Method in Social Science. A Realist Approach*. London: Routledge.
- Pierce, C. (1903/1990: 244) *Pragmatism och Kosmologi*. Göteborg: Daidalos.
- Wuisman, J. J. M. (2005) The logic of scientific discovery in critical realist social scientific research. *Journal of Critical Realism*, Vol 4, No 2: 366-394.